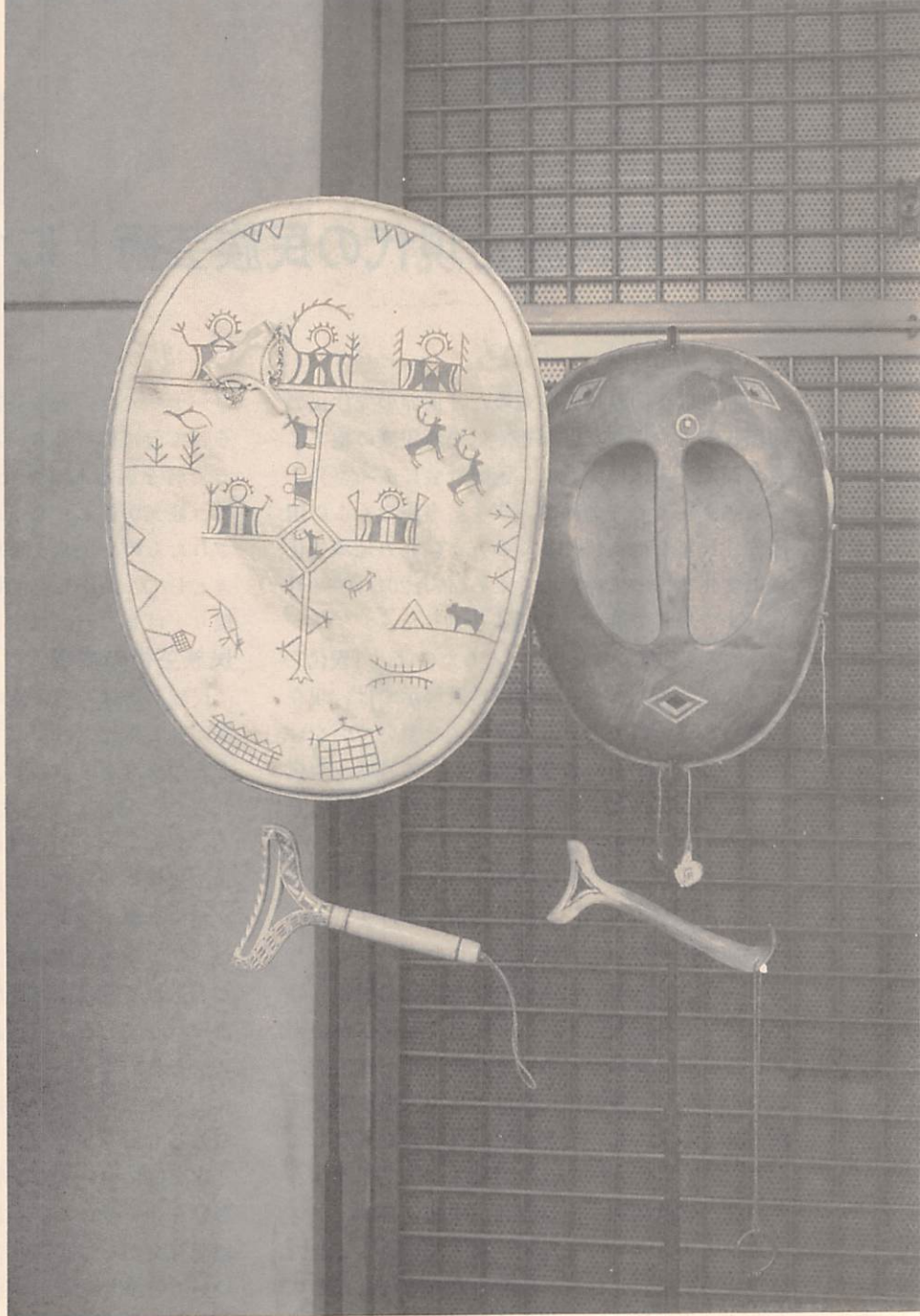




シャマンの太鼓

サミ

手前 スウェーデン・キルナ地方

縦 43.0cm 横 31.5cm

「北方諸民族と現代の民族芸術」について

1993年は、国際連合の定めた「世界の先住民の国際年」です。本年、国連では先住民族の抱えてきた問題と未来について、国際社会に広く啓発する活動を主として進めています。当館でもこの国際先住民年を機会に、多くの方々に北方地域先住民の文化を知っていただくため、7月20日から9月19日まで無料で特別展を開催しました。

今回の特別展でキーワードとしたのは、「現代」と「民族芸術」です。当館の常設展示では、現在の暮らしについてあまりスペースを割いていないため、道内外からの観覧者が多いこの時期、現代のこととして民族文化をとらえていただくことを目的の一つとしました。

そして、過去から現代に連なる文化要素のなかでも、民族芸術をテーマとして取り上げました。「民族芸術」という言葉は聞き慣れないかもしれませんが、それぞれの民族の精神文化や習慣、暮らしている地域の風土に支えられて発達した美術工芸や音楽、舞踊などの芸術全般を指します。これらの芸術は、地域や民族によって言語や生業活動が異なるように、自然環境や世界観を反映しており、美の基準や表現方法にも違いが見られます。

現在、北欧諸国、旧ソ連邦、中国、日本、アメリカ、カナダという先進国・超大国に属する北方諸民族の生活は、住居も服装も我々とほとんど変わりません。固有の言語も公用語に押されて話者が減少し、生業活動にも機械が導入され、雇用労働者が増加するなどの変化が起っています。そのようななかで、みやげとして製作・販売されている小物類や版画などには、民族の美意識と技術が受け継がれています。売ることを目的とし、伝統的な民族芸術からは多少デフォルメされているにしても、それを作ることで自らのアイデンティティを確認し、また、生計の助けにもなってきたみやげ品の製作は、民族を語るとき欠かせない一面だといえるでしょう。

展示は、大きく三つのスペースに分け、最初の

コーナーでは「民族芸術の変遷」と題し、およそ百年前に作られていた初期のみやげ品ともいえる資料を展示しました。メインとなるコーナーは、観光が盛んになったここ20～30年の間に製作されたものを民族・地域別に、最後には近年の動きとして、美術工芸品に付けられた商標について取り上げました。以下に詳細を紹介します。

民族芸術の変遷

民族芸術は、各民族のなかで独自に守り、受け継がれてきただけでなく、古くから近隣の民族などとの交流をとおして、文様や技術などが取り入れられ、発達してきました。先住民同志は 물론、スカンディナヴィアのサミでは西欧の、アムール川流域やサハリンの民族は中国などの強大な異文化の影響を受けてきました。18世紀になると、シベリアや新大陸の北方地域にも毛皮やクジラなどを求めて欧米人が進出し、先住民との接触が緊密になりました。交易品として、金属製品やビーズ、あるいはタバコ・茶などの嗜好品しょうこうが持ち込まれるとともに、みやげ品製作が先住民に依頼されることもありました。

北海道においても、特に江戸中期以降、本州の影響を強く受けるようになりました。幕末の蝦夷地紀行文からは、アイヌの作った木彫品や織物について特筆したものが多数見受けられます。

このような背景のもとで製作されたものとして、1900年頃にアラスカ北部のイヌイトがセイウチ牙くさば



閲覧コーナー



で作った、クリベッジというトランプゲームの点数盤を展示しました。これは、イヌイトの彫刻の技術と描写力を認めたアメリカ人が、自分の肖像画や地図などを牙に描かせたもので、この頃、最も人気があり最も高価なみやげだったといわれています。また、明治初期収集のアイヌの茶托、筆軸など5点を、東京国立博物館から借用して展示しました。どれも和人向けに製作されたもので、非常に繊細な彫刻が施されており、なかでも一本の木から削り出した鎖のついた手拭掛は、技術の高さを示すものでした。

観光の時代と民族芸術

二つの世界大戦を経たのち、世界的に観光ブームが起こり、北方地域の雄大な自然とともに、先住民族の文化も観光資源の一つとして注目されるようになりました。なかでも民族芸術をベースとして観光客向けに商品化された装身具や室内装飾品などの生産と販売、あるいは歌や踊りの公開は、先住民の生活を経済的に支える手段ともなってきました。

展示では、近年製作されたものばかりを、6つの民族あるいは地域に分け、それぞれに特徴的な美術工芸品をご観いただきました。特に注目していただきたいのは、サハリンのポロナイスク郊外オタスで日本の占領地時代に作られたトナカイ皮製品や、戦後サハリンから網走に移り住んだウイльтаの手工芸品でした。このような日本と深い関わりを持つ先住民の存在は、若い世代や道外の方にはあまり知られていない事実でしょう。

民族文化の継承と発展

観光みやげとして、先住民以外の人びとが作った模造品が氾濫するようになり、近年は品質の保証と管理を目的として、先住民自らが伝統的な手法によって製作したものに、商標をつける地域が増えています。商標は、政府や民族議会の承認の下、通し番号、製作者名や共同体名、製作年などが記されています。最後のコーナーでは、ア

ラスカ、カナダと北欧

から、商標のついたままの資料を展示しました。

また、このような民族文化に著作権を認めよという動きとともに、若い人たちの間にも自民族の文化を見詰め直そうとする気運が高まり、言語や民族芸術をはじめとする文化の保存と復興の運動が起こっています。そして、従来のものに創意と工夫を加えて生み出した新しい芸術に、社会的な評価と関心が集まってきています。こうした各地での民族文化継承の動きについては、映像や新聞記事を通して、具体的に紹介しました。民族芸術品製作の様子をナレーション入りで紹介したビデオの前では、足を止めて見入る観覧者が多数いらっしゃいました。今年元旦に各新聞で組まれた国際先住民年特集を中心に、関係記事といくつかの地域の民族芸術に関するパンフレットを用意した閲覧コーナーでは、大学生をはじめ関心を寄せて下さった方も多かったため、今後も考えていきたい企画です。

「現代」を扱うことや、観覧料無料、閲覧コーナーなど初めての試みに、難しさやとまどいを感じることもありましたが、「博物館の対象は自分たちとは別世界のこと」という従来のイメージから、今回の展示を通して「身近なこと」という印象を少しでも持っていただければ、特別展の目的は果たせたと思います。国連の国際先住民年のポスターや、閲覧コーナーの冊子、アイヌの木彫品などについて「どこで手に入りますか」といった質問の多かったこと、「記事をコピーしてほしい」という依頼や「カタログはないのか」というご意見は大変ありがたく受けとめました。

最後に東京国立博物館をはじめ、アイヌ無形文化伝承保存会および各国大使館や新聞各社などから多くのご協力をいただき、改めて感謝申し上げます。
(学芸課 齋藤 玲子)

ボードレス時代の北方地域研究

講師／北海道大学助手 池谷 和信 氏

北海道アイヌや東北地方のマタギ、さらにアフリカのサン（ブッシュマン）、フルベといった狩猟採集民、牧畜民の民族調査を行っている池谷和信氏を講師にお迎えし、8月29日に講習会を開催しました。今日の北方文化研究の課題や、国境をはじめ経済や組織、時間などにおいて、従来の線引きが消えてしまっている現代社会における、北方地域研究の枠組みを提示いただきました。以下にその要旨を紹介します。

先住民をめぐる情報環境

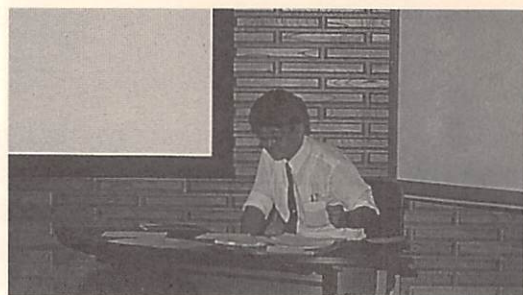
先住民の伝統的文化を過去の残存物としてとらえ、それだけを強調し過ぎるため、数百年前と現在の先住民における価値観が異なっていることに気づきにくくなっている。また、先住民は自然とのバランスを保っているという生態学的な研究報告が多いため、一般の人びとに「未開である」というイメージを与えがちである。

例えばこの傾向は、昭和20年代の民族学者によるアイヌ研究にみられ、いつの時代の、どこのアイヌ文化の復元かが曖昧のまま、文化要素が独り歩きしてしまった感がある。また、国際先住民年の今年は、多様な価値観を持つ先住民の人びとの意向と合わないまま、彼らの文化に関するさまざまな報道がなされていることは否めない。

混住社会の地域史の中での民族

従来の民族研究（特に物質文化研究）では、資料がより古く、伝統的なものであるならば、使われた地域や年代があまり重視されない傾向がみられる。

しかし、民族研究に歴史学的な視点を取り入れ、時間軸と空間軸を加えることで、周辺の民族との関わりや歴史的な流れの中で、より鮮明に民族文化をとらえることができる。例えば、経済的な側面からアイヌの生活を時代とともにみると、江戸時代では場所請負制による漁業、明治・大正期には国策による林業、昭和の高度経済成長期には民芸品の販売に代表される観光業と深く関わってお



り、また地域によって関わり方が異なっている。すなわち、アイヌ文化はいつも独立して存在しているのではなく、常に和人などの周辺民族と「混住」しながら地域社会を形成してきた歴史がある。

管理された北方民族

さらにこの枠組みに、国家政策や国民経済という要素を重ねる必要がある。例えば旧ソ連におけるペレストロイカ期のトナカイ牧畜では、国の政策により各地域に自給経済が求められた。そのため、トナカイの角からとれる薬を韓国に輸出することを目的とした牧畜が盛んになっていた。また、焼畑農耕を戦後も行ってきた日本の山村では、九州の山茶、四国のミツマタ、白山山麓の蕎麦といった商品作物が明治後期・大正期に焼畑農耕と結び付いていた。これらは農民の重要な現金収入源になっており、焼畑農耕が地域経済に組み込まれていたことがわかる。伝統的な文化をみるときは、国家政策や地域経済システムといった、その文化を包含している要素との関わりも見逃すことができない。

ロシアや北米といった北方地域では、私が調査しているサハラ以南のアフリカより、国家による管理の力が強くその歴史も長いから、民族研究の上で、特にこの最後の視点が必要とされるだろう。

博物館では古い資料を扱う機会が多いため、民族の伝統的な文化のみを追求しがちです。そのため、各民族の今日の生活をとらえる視点を欠いていることがあるかもしれません。また、民族研究の成果を市民に正しく伝える場としての博物館は、マスコミと同様にその社会的責務が大きいことも痛感しました。

○平成5年度第2回講習会 北欧サミのひも作り

講師／笹倉いる美（当館学芸員）

サミの人びとはベルトや靴ひも、ゆりかごのしぼりひもなど、さまざまなところに手作りのひもを使ってきました。このひもは、2点間に経糸を張って織るだけの極めてシンプルな織り方から作り出されます。



8月1日に行われた講習会では、まずサミの人たちの間で使われているひもを作る道具と材料についての説明があり、その後、実際にひも作りにとりかかりました。受講者にわたされたおもな道具はプラスチックの板に溝と穴が交互に配された箆、漁網を編むための網針を代用した杵、経糸を固定するための万力、それとあらかじめ用意した色とりどりの毛糸です。

作業は箆に経糸を通すところから始まります。それが完了すると、一方は万力で机に、もう一方は織り手の身体に経糸をくくり付け、箆を上下しながら経糸に緯糸をくぐらせてゆき、織る工程が開始されます。このひも織りは簡単素朴なものですが、だからこそ織る人の糸の締め具合、力加減もすぐに出来映えに影響します。模様はひも織りの重要な要素ですが、講習会では時間の関係上、これを織り込むには至りませんでした。1時間30分程度の時間で、大半の受講者は幅3センチ、長さ30～40センチのひもを織り上げました。

夏休み中の日曜日ということもあり、受講者は小学生から大学生、主婦など20人。和気あいあいとした雰囲気の中にも、初めてのことに真剣に挑む姿がありました。講習の始めに、机の上の材料を見たときの受講者の不安顔も、終わりに近づいたころに手元にできてくるひもをながめ、満足顔に変わりました。毛糸と素朴な道具からこんなステキなひもが織り上がるとは、という感想が聞かれました。

本シンポジウムは紋別市民会館で開催され、ここではその講演、研究発表のなかでニヴフに関連した二つの講演の要旨について報告します。

北海道大学の菊池俊彦氏は「オホーツク文化とニヴフ民族」と題して、極東の先史文化のなかでも最近特に注目を集めているオホーツク文化の起源について講演された。同文化は5世紀頃にサハリンに発祥し、アムール川河口域からサハリン、北海道、千島列島にひろがり、13世紀頃まで存続したと考えられ、アムール川流域のオホーツク文化に由来すると考えられる遺物が多く含まれることから、その起源をアムール川流域に求める考えが従来提唱されてきた。同氏はこれら遺物の比較検討から、共通する要素に乏しく両文化は基本的に異なるとの結論に達し、中国の歴史書の記録から同文化期に含まれる7世紀中にはサハリンにニヴフの人たちがすでに居住していたと考えられることや、最近の

環オホーツク海文化のつどい

8.28～29 於：紋別

調査から同文化圏はロシアのオホーツク海北西岸にもおよび、隣接の先史海獣狩猟文化との相互交流関係にあったことなどを主な論点として興味深いオホーツク文化＝ニヴフ説を展開された。

次に千葉大学の荻原真子氏は「数のシンボリズムから見たニヴフ文化」と題して、E.A.クレイノヴィッチのニヴフ民族誌に示されているクマ送り儀礼、婚約や誕生、葬送儀礼、シャマニズムに三と四の数がそれぞれ男性、女性に対応して繰り返して現われることを多くの事例から示し、他の諸民族にもみられる特定の数に対する観念と同様に、これらはニヴフ社会で守られてきた古い伝統をもつ固有の観念であると指摘された。そして、しばしば問題にされる飼い熊型クマ送り儀礼の起源に関連して、これら数の観念の存在からニヴフのクマ送り儀礼の起源は新しいものではないとする注目すべき見解を述べられた。（学芸課 渡部 裕）

調査概報

第7次ペリーベイ学術調査

はじめに

カナダ北西準州のイヌイトの村ペリーベイ（人口約450人）において、6月中旬から約2か月半にわたり、民族学、考古学の調査が行われ、このうち筆者は7月27日から8月27日まで参加しました。この調査は文部省科学研究費補助金（国際学術研究・課題番号04041099）によるものです。

ペリーベイでの一連の調査は、スチュアート・ヘンリ氏（目白学園女子短期大学・東京）が中心となり、過去6回にわたり行われてきました。今回はペリーベイ村とそこから北西に約50km離れたところにあるティニバユック地区との2か所において、同氏を含めた日本からの7人のスタッフにより行われました。

伝統的な生業と現在の生活

この地域のイヌイトは、一般にネツリック・イヌイトとよばれ、今世紀のはじめまで欧米の探検家とあまり接触することがありませんでした。そのため、夏は陸上のテントに住み、カリブー^{シカ}やアザラシ^{アザラシ}を使ったホッキョクイワナ^{アザラシ}漁を行い、冬は海氷上にイグルー（雪の家）を造り、アザラシ^{アザラシ}を行^{アザラシ}うといった伝統的な生活が、ほかの地域に住むイヌイトにくらべ、最近までみられました。

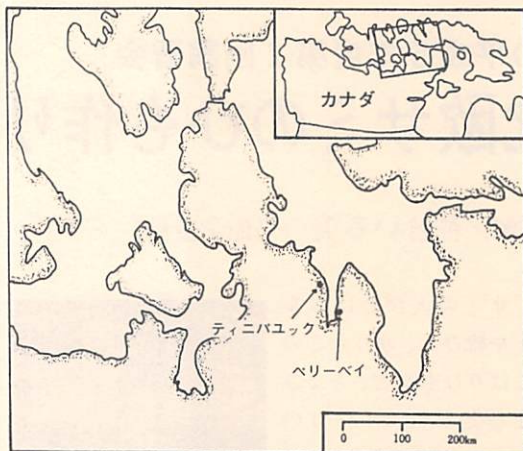
1960年頃にカナダ政府が進めた定住化政策により、このような季節移動の生活パターンが変化し、1つの村に定住しながら生業キャンプとの間を往き来する生活が始まりました（写真1）。それにともない貨幣経済が浸透し、今日では夏の間、飛行場



写真1
ペリーベイに住むイヌイトの典型的な住居



写真2
数時間で200匹ほどのホッキョクイワナが捕れた



滑走路の拡張工事や道路工事といった季節労働に従事するイヌイトが多くなっています。しかし今でも、週末には船外機つきのボートを繰出し、村から数十キロ離れたところまで行き、日帰りやキャンプを伴った漁撈や狩猟を営んでいます。そこで得られた魚や獣は、今でも彼らの重要な食糧源となっています。

今回の調査内容

ペリーベイ村での主な調査内容は、目、口、鼻といった人間の200以上の身体部位の名称をイヌイトのことば（イヌクティトゥット）で確認すること。また色のカードを示し、色を表すあることばが色相のどの範囲まで適用されているかという色彩認識の調査。さらには、現代のイヌイト社会における女性の役割に関する分析などの民族学的な調査です。

ティニバユック地区では、今から数十年前まで使用されていた石造りの貯蔵施設、魚干し台、カヤック台、およびテントリング（テント解体後、環状に残されたテント地を押さえた石）や現在使用されている石積み^{なであな}の築、さらに年代は不明ですが、傾斜地を利用した石積みの堅穴住居などを考古学的に測量しました。この地区の貯蔵施設を実際に利用した古老が今も村に健在であり、それに関する聞き取り調査も併せて行いました。

また、ここでの調査はイヌイトの1家族とともに行われ、キャンプ期間中、彼らが私たちの食糧を調達してくれました。ホッキョクイワナの築漁（写真2）や網漁、銃によるアザラシやカリブー^{シカ}の際には、調査スタッフも参加し、その様子を記録しました。

（学芸課 佐々木 亨）

Q

北欧に生活するサミが使っていたシャマンの太鼓の皮には、いろいろな文様が描かれていますが、どんな意味があるのですか。また、角でできた付属品はどのように使われるのか教えて下さい。

A 太鼓の皮の表面に引かれている横線より、上が神々の世界、下が現実の世界を表しています。現実の世界の中央にある十字の中心は太陽を表現し、その左の人間は晴天を、右の人間は降雪を象徴しています。またこの世界には、トナカイ、クマ、ヘラジカ、オオカ

ミ、ライチョウといったサミと関わりの深い動物が描かれています。太鼓の縁には、三角形を2つ並べたコタ（テント）、左下には梯子のついた高床式の貯蔵庫、下には壁が縦横の線で描かれている丸太小屋がみられます。すなわち、神々の住むところを含めたサミの世界が、この太鼓の皮に描かれています（表紙写真参照）。

指針は、シャマンが占いをするとき用いられます。皮が地面と水平になるように太鼓を握り、皮の上に指針を置いて、ハンマーで太鼓を叩きます。その時、指針が文様の上、つまりサミの世界をどの

ように動いたかで将来を占います。
(学芸課 佐々木 亨)

企画展

『オホーツク文化・

調査最前線』

11/2（火）～14（日）

当館で平成3年から実施してきた湧別町川西遺跡の発掘調査の成果を公表し、併せてここ数年間に行われたオホーツク文化遺跡の貴重な発掘資料を、枝幸町と常呂町から借用して紹介します。

最終日の14日には、青柳文吉主任学芸員による関連の講座が午後2時から開催されます。

企画展の観覧料は無料です。

第8回北方民族文化シンポジウムのお知らせ

■講演会『日本人はどこから来たか』講師：松本秀雄氏（大阪医科大学）

日時：11月9日（火）午後6時から

会場：網走セントラルホテル（網走市南2条西3丁目）

■シンポジウム『北方針葉樹林帯の人と文化』

北アメリカ、ユーラシアの北方針葉樹林帯における民族文化の形成過程と各民族文化を比較検討し、この地域における文化の本質を明らかにすることを目的とします。北アメリカについてはアサバスカ・インディアンを、ユーラシアにおいてはツングースを中心に据えて発表と討論を行い、また、日本とその周辺における北方森林的文化要素についても考えます。

パネラー：E. J. ディクソン氏（アメリカ合衆国・アラスカ大学博物館）

P. A. マコーマック氏（カナダ・アルバータ州立博物館）

A. V. スモリャーク氏（ロシア共和国・ロシア科学アカデミー）他、国内より6名

日時：11月11日（木）、12日（金）ともに午前9時30分から

会場：網走セントラルホテル

博物館フォーラムのお知らせ

■博物館と地域研究 テーマ『アイヌ文化の成立を考える』

日時：12月2日（木）午前9時45分から午後5時まで

会場：網走市サイクリングターミナル（網走市桂町4-7-2）

対象：市町村等の社会教育・学校教育関係者、研究者および一般。

本博物館フォーラムは、地域に根差した博物館づくりの一環として開催するもので、歴史をはじめとするさまざまな分野の地域研究に資することを目的としています。

今回は第一回として、北海道におけるアイヌ文化の成立について、考古学的な視点から研究報告と討論を行い、理解を深めます。

講演・講師：宇田川洋氏（東京大学）

西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）

事例研究発表者：越田賢一郎氏（北海道埋蔵文化財センター） 松田猛氏（釧路市埋蔵文化財調査センター）

敷中剛司氏（アイヌ民族博物館）

涌坂周一氏（羅臼町教育委員会）（五十音順）

シンポジウム、フォーラムともに入場は無料です。詳細とお申し込みについては当館にお問い合わせ下さい。

寄贈資料紹介

○イヌイトの仮面

アラスカ・イヌイトの鯨骨製仮面1点が、東京のアラスカ州観光局から寄贈されました。

○ニブフの人形

サハリンで作られたニブフの人形1点が、札幌市の岡田淳子氏から寄贈されました。

○アラスカの室内装飾品

イヌイトの一家族の顔を模した室内装飾品6点が、東京のアラスカ州政府在日事務所から寄贈されました。

○サミに関するビデオ

ノルウェー外務省・自治省制作『ノルウェーのサミ民族』(35分)が、東京のノルウェー王国大使館から寄贈されました。

○沖縄の針突に関するビデオ

『沖縄地方の針突に関する映像資料』(全12巻)が、同研究・制作代表者である奈良県田原本町の市川重治氏から寄贈されました。

執筆ならびに出版社から
贈呈をうけた書籍 (7月～9月)

A・チャダーエヴァ 斎藤君子訳『シベリア民族玩具の謎』恒文社 1993

大林太良編『世界を掘る』学生社 1993

風間伸次郎採録・訳注『ナーナイ語テキスト』小樽商科大学言語センター 1993

津曲敏郎編『朝克著「エウンキ語基礎語彙集」索引』小樽商科大学言語センター 1993

十勝大百科事典刊行会『十勝大百科事典』北海道新聞社 1993

福岡ト子『アイヌと植物』旭川振興公社 1993

ボンサ・K・キレ 佐々木史郎他編訳『ナーナイの民族遊戯』小樽商科大学言語センター 1993

観覧10万人目の原田さんら



村崎恭子編『サハリンの少数民族』横浜国立大学教育学部 1993

諸岡博熊『珈琲大百科』いなほ書房 1993

諸岡博熊『ミュージアム マネージメント』創元社 1993

渡辺仁他『平成4年度アイヌ民俗文化財調査報告書(アイヌ民俗調査Ⅱ)』北海道教育委員会 1993

主な来館者

7/14 李伯謙氏(北京大学教授)他2名

7/29 P.H.R.ステップニー氏(カナダアルバータ州立博物館長)J.W.アイヴズ氏(同副館長)

7/30 赤祖父俊一氏(アラスカ大学地球物理学研究所長)他3名

8/27 沖縄県立博物館新館建設委員会一行11名

9/3 遠藤欣一郎氏(日本玩具資料館理事)

観覧者動向 7月～9月

7月	6,791名
8月	8,126名
9月	5,579名

常設展示観覧者が10万人に!

去る7月2日、開館から2年5か月で常設展示の観覧者が10万人に達しました。10万人目となられたのは、山口県にお住まいの原田多美子さん。先に入館した夫の栄さんと、その後に修学旅行を引率していらした常磐本学園(仙台)の教諭・小山美恵さんの3人に記念品を贈呈しました。多くの観覧者を迎えられることに感謝しながら、博物館の一層の充実を改めて誓いました。

みんぞく

こうこ

はくぶつかん

in Hokkaido (7月～9月)

7/6 市立釧路図書館で先住民族の本を集めた特設コーナー開設/D

7/19 古代のロマン楽しんで「ところ遺跡の館」がオープン/D

7/28 道開拓記念館でアルバータ州先住民族文化特別展開幕/M

8/7 オホーツクの民族ニヴフ展・紋別市立図書館で開催/M

8/20 国際先住民年記念「'93二風谷フォーラム」平取で開催/各紙

9/2 旭川に「大雪クリスタルホール」オープン・音楽ホール、国際会議場、博物館の複合施設/M

9/13 道ウタリ協会札幌支部主催「先住民年記念フォーラム」でアイヌ新法など討議/D、M

9/22 グアテマラのメンチュウ氏、北海道でアイヌと交流/各紙

9/29 美幌博物館で「縄文人の世界展」開催/M

D 北海道新聞(オホーツク版)

M 毎日新聞(道東北版)他

複数紙掲載の場合は、扱いの大きい方を紹介しています。

編集後記

今年になって、資料を寄贈いただくことが多くなった。多少なりとも、当館の趣旨や活動が知られるようになったのか、「そういう物をお持ちなら博物館へ」と周囲の勧めもあったという。

博物館だより最後のこのページが一杯に埋るのは、嬉しいことである。今回は、編集後記のスペースが少々足りなくなってしまうほどだった。(斎藤)